

三つの石を捨てて、十の石につくことはやすし。
十を捨てて、十一につく事はかたし。

◆吉田兼好『徒然草』

鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての文人。神祇官として朝廷に仕え、
宮廷内部や貴族社会に通曉していた。『徒然草』は、吉田兼好が遁世して
から執筆した隨想録である。

人の生き方を、碁に喩えたもの。

碁は損得を計算しながら着手を考える競技で、自分の石を三つ捨てても、相手の十の石を奪
えば有利となる。この程度の判断ならば、誰にでもできるが、十の石を捨てて十一の石を奪う
となると、なかなか決心がつかない。自分の十個の石を、むざむざと捨てることに、未練を持
つからだ。

苦境に立つたときにこそ、人の真価が問われる。焦つてますます危機に陥つてしまふ人と、
冷静にプラスとマイナスを勘案して窮地を脱する人との、浮沈が分かれてくる。

鰐節の老舗「にんべん」は江戸末期、日本で初めて商品券を発行した企業である。ところが
明治三十二年（一八九九）、「東都日報」が「にんべんは破産寸前だ」という記事を出した。こ
のため商品券を持つた客が、数千人も日本橋の本店へ押しかけるという騒ぎになつた。当時の
にんべん社長は全社員を動員して、ありつけの在庫品を積み出し、五万四千枚の商品券をす
べて遅滞なく鰐節と交換させた。それも表示価格より上等品だったため、にんべんの信用は逆
に上昇した。まさに「十の石を捨て、十一の石を取った」のである。

つまり人生でも、物事に迷つたときは「よくよく熟慮（計算）して、わずかであつても良い
方を選べ」ということだ。